

病害虫発生予察情報(8月予報)

令和7年7月29日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	葉いもち・穂いもち	発生量：少 (葉いもち発病株率2.3%) (穂いもち発病株率0.04%)	7月中下旬葉いもち発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	紋枯病	発生量：やや少 (発病株率6.7%)	7月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ごま葉枯病	発生量：多 (発病株率16.0%)	7月中下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	稲こうじ病	発生量：やや少 (発病株率0.3%)	昨年9月発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	トビイロウンカ	発生量：並 (寄生虫数：0.05頭/株)	7月中下旬発生量：並(発生なし) (±) 7月予察灯誘殺数：並(誘殺なし) (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	斑点米カメムシ類	発生量：多	7月中下旬発生量：多 (＋) 予察灯誘殺数：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	コブノメイガ	発生量：やや多 (被害株率2.4%)	7月中下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	イチモンジセセリ (イネツトムシ)	発生量：少 (25株あたり寄生数0.4頭)	7月中下旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
かんしょ	ナカジロシタバ	発生量：多 (寄生虫数0.1頭/m ²)	7月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	イモキバガ (イモコガ)	発生量：多 (巻葉数7.3葉/m ²)	7月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	エビガラスズメ	発生量：やや多 (寄生虫数0.05頭/m ²)	7月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
温州 みかん	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.1)	7月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黒点病	発生量：多 (発病度 1.5)	7月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ミカンハダニ	発生量：やや多 ただし、西部：多 (寄生葉率 5.7%)	7月中旬発生量：やや多 (＋) ただし、西部：多 (＋) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：多 (寄生果率 0.1%)	7月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.6)	7月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
なし	ハダニ類	発生量：やや少	7月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ナシヒメシンクイ	発生量：やや少	7月上旬発生量：少(発生なし) (－) フェロモン誘殺数：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
かき	フジコナ カイガラムシ	発生量：やや少 (寄生果率 0.8%)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ハマキムシ類	発生量：やや多	7月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
果樹全般	カメムシ類	発生量：やや多	越冬量：多 (＋) 予察灯誘殺数：多 (＋) フェロモントラップ誘殺数：多 (＋) ヒノキ着果量：少 (－) ヒノキ寄生数：並 (±) ヒノキ球果吸汁痕数：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
茶	炭疽病	発生量：やや少 (病葉数 22.2 葉/1.25m ²)	7月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	輪斑病	発生量：多 (病葉数 5.3 葉/1.25m ²)	7月中下旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	新梢枯死症	発生量：やや少 (発症枝数 5.3 枝/1.25m ²)	7月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+)
	カンザワハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率 4.3%)	7月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.5 頭/1.25m ²) 発生時期：並～早い	7月中下旬発生量：少 (－) 第1世代成虫発生量：並～多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.6 頭/1.25m ²) 発生時期：並～早い	7月中下旬発生量：少 (－) 第1世代成虫発生量：並～多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数 1.0 葉/1.25m ²)	7月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (叩き落とし虫数 10.7 頭/4 力所)	7月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 0.8 頭/4 力所)	7月中下旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ヨモギエダシャク	発生量：多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 力所)	7月中下旬発生量：やや多 (+) 病害虫防除員の報告：多～やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：やや多 (寄生株率 4.8%) 発生時期：早い	7月中下旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	きく (施設)	黒斑病・褐斑病	発生量：やや少 (発病株率：0.4%)
アザミウマ類		発生量：やや少 (被害株率：16.5%)	7月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+)
ハダニ類		発生量：やや少 (被害株率：4.7%)	7月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+)
作物全般	ハスモンヨトウ	発生量：多	フェロモントラップ誘殺数：少～多 (－～＋) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	オオタバコガ	発生量：多	フェロモントラップ誘殺数：並～多 (±～＋) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期の記載がある場合は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去 10 年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

静岡県病害
虫防除所 HP



静岡県病害虫防除所 HP

[https://www.pref.shizuoka.jp/sangyos
higoto/norinjimusho/1058658/boujo/i
ndex.html](https://www.pref.shizuoka.jp/sangyos
higoto/norinjimusho/1058658/boujo/i
ndex.html)

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

<生育の概況等>

巡回時（調査期間：7月11～22日）の生育は、早期栽培が幼穂形成期～糊熟期、普通期栽培が分けつ期～幼穂形成期であった。病害虫防除員からのアンケート調査によると、生育は平年並～早い傾向。

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.9%）と平年より少なかった。
- ・本病の孢子形成から発芽、イネへの侵入、感染の成り立つ適温は25℃前後で、降雨等によるイネの濡れ時間が長いほど孢子の侵入量が多くなる。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤による予防散布を行う。
- ・近年、他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念される。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの[「殺菌剤使用ガイドライン」](#)を参照。

●紋枯病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年0.8%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（本病原菌は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生したほ場では発生しやすい。発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため注意する。

●ごま葉枯病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は16.3%（平年3.7%）と平年より多かった。
- ・本病は近年全国的に発生面積が増加している。発病には土壌条件の影響が大きいですが、気象条件については、25～30℃、湿度90%前後の結露しやすい状況が感染に好適である。また出穂期以降の高温はイネの本病に対する抵抗力が低下する。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・主要肥料成分では窒素およびカリの欠乏が発病を助長する。このほか可給態ケイ酸、鉄、マンガン、マグネシウムの欠乏と石灰の過剰が発病を助長するとされている。そのため肥料切れに注意し、必要に応じ穂肥などを施用する。
- ・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉から飛散した胞子により穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂揃期にかけて薬剤散布を行う。

●稲こうじ病

予報の根拠

- ・昨年9月の巡回調査では、平均発病株率は1.2%（平年1.9%）と平年よりやや少なかった。
- ・本病は穂ばらみ期頃の低温・多雨により発生が助長される。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。このため、常発ほ場では注意が必要である。
- ・本病の薬剤防除は予防散布が基本であり、適期は穂ばらみ期頃である。常発ほ場では、適期に薬剤防除を実施する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年最高寄生数0.002頭/株）。
- ・県内4か所の予察灯におけるトビイロウンカの誘殺は確認されなかった。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、増殖が助長される気象条件である。巡回調査および予察灯では本種の発生は確認されていないが、場所によっては飛来している可能性もあるため、ほ場をよく観察し、今後の発生に注意する。

防除対策

- ・例年、8月以降に発生量が増加する。
- ・本虫は世代交代を繰り返すことで急激に増殖する。特に8～9月に高温が継続する場合は急増し、数が増えてからでは効果の高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られず坪枯れを引き起こす場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。
- ・本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、出穂前及びその10～14日後の計2回の防除を検討する。また、本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用している場合であっても、可能な限り1回目の防除を検討する。
- ・葉色に注意し、水田内の一部が坪状に黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（イネカメムシ、アサジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

- ・県内4か所の予察灯における6月21日～7月15日の合計誘殺数は4,060頭（平年1,014頭、平年比4.0倍）と平年より多く推移しており、過去10年で最も多かった。
- ・イネカメムシの誘殺数は、磐田市加茂を除く3地点で過去4年間の平均より多く推移しており、島田市中河では26頭（過去4年平均6.8頭、平年比3.9倍）、磐田市長須賀では97頭（過去4年平均55.0頭、平年比1.8倍）、浜松市中央区雄踏町では16頭（過去4年平均2.8頭、平年比5.5倍）であった。
- ・誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ[「害虫誘殺グラフ」](#)で提供している。
- ・7月中下旬の水田周辺における雑草のすくい取り調査では、県平均捕獲数は40.1頭/30回振り（平年19.7頭/30回振り）と平年より多く、過去10年で最も多かった。地域別では、田方平坦地、東部高冷地および志太榛原地域で、平年に比べて多かった。
- ・7月中下旬に行った巡回調査にて、出穂前の水田内のヒエにイネカメムシの寄生が多数確認された。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

7月の畦畔・雑草地における斑点米カメムシ類の捕獲頭数（頭/30回振）

	田方平坦地	東部高冷地	志太榛原	中遠・西部 普通期	中遠 早期	県平均
本年度	20.3	5.5	112.2	29.8	15.0	40.1
平年	11.0	4.5	15.9	31.4	23.5	19.7

防除対策

- ・畦畔など水田の周囲のイネ科雑草は、斑点米カメムシ類（イネカメムシを除く）の発生源となるため、地域全体で一斉に除草する。また、アカスジカスミカメはカヤツリグサ科雑草にも寄生するので、カヤツリグサ科雑草も除草する。ただし、水稻の出穂間際の除草は斑点米カメムシ類の水田への侵入を助長するため、出穂 10 日前までに除草を終了する。
- ・斑点米カメムシ類（イネカメムシを除く）に対する薬剤散布は、成虫侵入期となる穂揃期（すべての茎のうち 80%の茎で穂が出た状態）とその 7～10 日後（幼虫ふ化期）の 2 回薬剤散布を行うと防除効果が高い。
- ・イネカメムシに対する薬剤散布は、不稔対策として成虫侵入期となる出穂期（すべての茎のうち 50%前後の茎で穂が出た状態）と斑点米対策として出穂期から 7～10 日後（幼虫ふ化期）に薬剤散布を行うと防除効果が高い。
- ・出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は地域一斉の薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構分類コードを参照し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤については、[「静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準」](#)を確認する。
- ・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稻のカメムシを防除する時期に多く、水稻のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は[農林水産省ホームページ](#)を参照する。

<その他の病虫害>

●コブノメイガ

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均被害株率は0.2%（平年0.2%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
- ・出穂期頃に加害されると登熟歩合が低下するので、普通期栽培では8月上～中旬に成幼虫の発生状況を確認し、成虫飛来最盛期の7～10日後（若齢幼虫期）に薬剤を散布する。ただし、上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。

●イチモンジセセリ（イネツトムシ）

- ・7月中下旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年寄生数0.02頭/25株）。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
- ・普通期栽培で葉色の濃い水田では被害が集中するので、葉巻の発生に注意し、葉巻内に幼虫が見られる場合は薬剤防除を行う。

【かんしょ】

＜生育の概況等＞

生育は平年に比べ5～10日遅くなっている。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

- ・ 7月中旬に行った巡回調査では、平均寄生幼虫数 0.6 頭/m²（平年 0.3 頭/m²）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

- ・ 7月中旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は 3.5 葉/m²（平年 1.1 葉/m²）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年、8月は葉の繁茂に伴い巻葉数が増加する。多発生のは場では、被害が拡大する前に防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

- ・ 7月中旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生幼虫数 0.03 頭/m²）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【温州みかん】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育は地域により異なり（数日遅い～数日早い）、着果量は平年並～やや少ない。

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.3（平年0.04）、葉の発病度は3.3（平年0.1）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

- ・ 温州みかんは本病に対して抵抗性を持つが、中晩柑類と近接している園では感染の可能性が高まるため注意する。
- ・ 本病は風雨により伝染する。台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・ 発病枝は伝染源となるため除去する。
- ・ 夏芽でのハモグリガ被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去する。
- ・ 風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣や防風網の整備など防風対策をする。
- ・ 防除対策については「[令和7年度技術情報第1号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）](#)」も参照する。

●黒点病

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、果実の発病度は1.4（平年0.5）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

- ・ 20～27℃の水滴中で孢子が発芽し、葉や果実に感染して黒点が出る。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。
- ・ 枯枝は伝染源になるため園地から除去する。
- ・ 防除実施日以降の累積降水量が250mm、または防除実施日から25～30日経過した時点が次の防除実施の目安となる。アメダスなどの気象データを確認し、栽培地域の累積降水量が増えた場合は防除を早めて実施する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は8.5%（平成6.7%）と平成よりやや多かった。地域別では、東部地域で0.9%（平成2.4%）、中部地域で4.3%（平成7.4%）、西部地域で19.5%（10.2%）と西部地域での発生が多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが、気温は平成より高いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・盛夏期は高温により本種の増殖は抑制され、土着天敵（カブリダニ類など）の活動が活発になることから、本種は減少する傾向にある。ただし、多発園（葉あたり雌成虫3～4頭を超える園地）では薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均寄生果率は2.9%（平成0.2%）と平成より多かった。地域別では、東部地域で3.9%（平成0.1%）、中部地域で2.8%（平成0.1%）、西部地域で2.1%（平成0.2%）と県全域で発生が多かった。
- ・果梗部及び果頂部における平均被害度はそれぞれ0.1（平成0.4）及び0.05（平成0.02）であった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが、気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・アメダス気象データを用いた予測によると、今後の気温が平成並で推移した場合、第5世代成虫の発生ピークは7月30日～8月15日、第6世代成虫の発生ピークは8月16日～9月3日と予想される（昨年より2～3日程度遅い。産地により発生時期が異なる）。なお、今後の気温が平成より高く推移した場合、各世代成虫発生ピークは早まるため注意する。
- ・産地ごとの詳細な防除時期は、病虫害防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」を参照する。
- ・本種各世代において、飛来最盛日の1週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。
- ・光反射シートマルチを利用する場合には、樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上のシートを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

<その他の病害虫>

●ゴマダラカミキリ

防除対策

- ・病虫害防除員からの情報によると、本種の多発園地が散見されている。成虫の飛来が多い園地では、卵やふ化幼虫を対象として、主幹から株元にかけて薬剤散布し、幼虫の食入を防止する。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、果実の発病度は1.5（平年0.3）、葉の発病度は2.3（平年0.6）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。ただし、台風などの強風を伴う雨によって助長される。

防除対策

- ・本病は風雨により伝染する。台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する可能性がある。気象情報と園地の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・発病枝は伝染源となるため除去する。
- ・夏芽でのハモグリガ被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行い、被害枝は除去する。
- ・風ずれなどの傷口から病原菌が侵入するため、防風垣や防風網の整備など防風対策をする。
- ・防除対策については「[令和7年度技術情報第1号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）](#)」も参照する。

【なし】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年並～数日遅い。果実の肥大は平年並～やや遅く、少雨の影響で小玉傾向である。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・7月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生葉率2.9%）。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・発生園地では収穫前日数に注意して防除を行う。
- ・葉あたり雌成虫1頭以上または寄生葉率20%以上が防除の目安である。

●ナシヒメシンクイ

予報の根拠

- ・7月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年被害果率0.02%）。
- ・浜松市内におけるフェロモントラップへの誘殺数は、平年並で推移している。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年8月は成虫の発生が多いため、無袋栽培園では収穫時期に注意し、防除を行う。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」を参照する。

【かき】

＜生育の概況等＞

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年並の地域が多く、着果量は地域により異なっている（平年並～多い）。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均寄生果率は0.2%（平年0.5%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 発生がみられるほ場では直ちに防除する。なお、本種は果実とへたの間に寄生しており薬剤が届きにくいいため、丁寧に散布を行う。

●ハマキムシ類（チャハマキ、チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均被害葉率は0.5%（平年0.5%）と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおける成虫の誘殺状況に注意し、適期に防除する。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#)を参照する。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・ 2～3月の越冬量調査（県内20地点）において、チャバネアオカメムシ越冬量／落葉1㎡は、県平均2.9頭（平年1.0頭）と平年より多かった。
- ・ 県内4か所の予察灯における7月1～15日の合計誘殺数の平均は、234.8頭（平年87.2頭、平年比2.7倍）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが198.0頭（平年65.0頭）、ツヤアオカメムシが14.8頭（平年9.4頭）、クサギカメムシが22.0頭（平年12.8頭）であった。
- ・ 県内6か所のフェロモントラップにおける7月1～15日の合計誘殺数の平均は、453.2頭（平年178.2頭）と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが440.9頭（平年171.6頭）、ツヤアオカメムシが4.8頭（平年3.9頭）、クサギカメムシが7.5頭（平年2.6頭）であった。
- ・ ヒノキ球果の着果量（指数）は、県平均1.9（平年4.9）と平年より少なかった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が少ないと新成虫の増殖は抑制される。
- ・ ヒノキ球果における本虫の平均寄生数は、10結果枝あたり2.2頭（平年2.4頭）と平年並であった。
- ・ 7月中旬のヒノキ球果における本虫の平均吸汁痕／球果は1.1（平年1.2）と平年並であった。なお、本県ではヒノキ球果における吸汁痕数が20に近づくと、本虫がヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。

- ・以上をまとめると、平年に比べて、越冬量は多く、予察灯及びフェロモントラップへの誘殺数は多く、ヒノキ着果量は少なく、ヒノキ球果での寄生数及び吸汁痕数はともに平年並であった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本虫の発生を助長する。
- ・1か月予報を加味すると、8月の果樹園への成虫飛来数は平年よりやや多いと予想される。

防除対策

- ・ヒノキ球果での本虫吸汁痕数をもとにした予測式（堤、2003）によるヒノキからの離脱予測日（果樹園への飛来予測日）は、9月3～6日頃（地域により異なる）と予想される。ただし、吸汁痕数が最も多い地点での飛来予測日は8月26日頃と予想される。また、高温等により本虫が急増し、ヒノキ球果を吸い尽くすと、新たな餌を求めて果樹園へ予測よりも早期に飛来する可能性もあるため注意する。
- ・昨年、西日本等の果樹産地では、カメムシ類の越冬成虫が4～8月にかけて果樹園に大量飛来し、本虫の加害による落花・落果・新梢枯死等の被害が生じた。本県においても越冬成虫の飛来に細心の注意を払う。なお、静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
- ・静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」から発生状況等の最新情報を確認するとともに、地域の予察灯やフェロモントラップにおけるカメムシ類の発生状況を参考にし、ほ場の見回りをこまめに行う。ほ場で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に、直ちに薬剤防除を行う。また、周辺ほ場への大量飛来がみられた場合、飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。なお、本虫の移動範囲は広いため、地域での一斉防除が効果的である。また、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合がありますので注意する。
- ・薬剤防除については、静岡県病虫害防除所による「[静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準](#)」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。
- ・防除対策については、「[令和6年度注意報第6号（かんきつ、びわ、落葉果樹 果樹カメムシ類）](#)」も参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

7月中下旬の巡回調査時では、三番茶芽が生育中の茶園と、二番茶後に深刈りを行った茶園が多く認められた。また、芽の生育も茶園によりばらつきがみられた。防除員からの情報では生育は平年並～やや遅れている茶園が多かった。

●炭疽病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病葉数は9.4葉/1.25㎡（平年16.1葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・本病の感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（分生子の発芽適温22～27℃）。

防除対策

- ・新芽開葉期に半日以上続く降雨があった場合は、早めに防除を行う。なお、萌芽期～1葉開葉期には予防剤（ダコニール1000、フロンサイドSCなど）を使用することでDMI剤の連用を可能な限り避ける。

●輪斑病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病葉数は29.3葉/1.25㎡（平年18.6葉/1.25㎡）と平年より多かった。
- ・本病の発病は25℃以上の高い気温が好適である。1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。なお降雨の多少は本病の発生程度に影響しない。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が発病を助長するため、常発園では、整枝等の作業を行った際には、翌日までに薬剤による防除を行う。

●新梢枯死症

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発症枝数は0.2枝/1.25㎡（平年1.9枝/1.25㎡）と平年より少なかった。なお、本症状の原因として輪斑病菌が関与しているものは半数程度であることが判明しており、残りは多雨による水腐れや高温等による生理的な要因と考えられる。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本症状の発生を助長する。

防除対策

- ・三番茶芽の萌芽期から生育期に、2回程度薬剤を散布する。なお、QoI剤は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、樹冠面での平均寄生葉率は0.3%（平年0.6%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・降水量が少なく推移すると多発する恐れがあるため、茶園を観察して発生に注意し、早期防除に努める。

●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.04頭/1.25㎡（平年0.46頭/1.25㎡）、チャノコカクモンハマキが0.02頭/1.25㎡（平年0.37頭/1.25㎡）で、両種ともに平年より少なかった。
- ・予察灯及びフェロモントラップにおける第1世代成虫誘殺数は、平年並～多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
- ・本年は第1世代成虫発生時期が平年並～早かった。このため、第2世代成虫発生盛期は平年並～早い見込みで、第3世代幼虫の発生時期は平年並～早いことが予想される。

防除対策

- ・地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#) で提供している。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.7葉/1.25㎡（平年1.1葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、高温により本種の発生はあまり助長されない。

防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・二番茶後に深刈りした茶園が多く、そのような茶園では新芽の生育時期が例年とは異なる。そのため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移に注意し、成虫の発生盛期と新芽の生育時期が合致する場合は、新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#) で提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、雨天の調査の影響もあり、平均叩き落とし虫数は7.8頭/4か所（平成11.6頭/4か所）と平成より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に深刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、雨天の調査の影響もあり、平均叩き落とし虫数は2.1頭/4か所（平成2.9頭/4か所）と平成よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが気温は平成より高いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・近年、8月の発生量は7月に比べ同等かやや少ない傾向である。ただし、新芽生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に深刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽開葉期に防除を実施する。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.2頭/4か所（平成0.1頭/4か所）と平成よりやや多かった。また、病害虫防除員12名中6名が、平成よりも多～やや多の報告だった。
- ・茶業研究センターの予察灯における第1世代成虫の誘殺数は平成より多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年8月中旬頃から予察灯への成虫誘殺数が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.8%（平成0.6%）と平成よりやや多かった。
- ・アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第3世代予想ふ化最盛日は、7月29日の計算によると平成より10日早い8月31日と予想される。なお、今後の気温が平成より高く推移した場合、予想ふ化最盛日は遅くなるため注意する。

防除対策

- ・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については静岡県病害虫防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」で提供している。なお、7月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

<その他の病害虫>

●マダラカサハラハムシ

- ・一番茶時期に被害が発生したような常発地域では、新成虫が発生する8月中下旬頃の防除を徹底する。薬剤については、[「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」](#)を参照する。

【いちご】

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・本病の生育適温は28℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。
- ・発病株からその周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培土も含めて抜取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。
- ・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、頭上かん水は避け、株元かん水など水の跳ね返りを防ぐ形でかん水を行う。
- ・薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。感受性低下の疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC:1）、QoI 殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤抵抗性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1~11）を使用する。
- ・発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後は重点的に防除を行う。
- ・発病株や発病が疑われる株は定植苗には使用せず、本ぼへ持ち込まない。

●うどんこ病

- ・7月以降、高温期は本病の生育が停滞し発生が終息したように見えるが、最高気温が30℃を下回りだすと再び生育し始め、発生が順次増加する。多発すると防除が困難になるため、育苗中から予防防除を徹底し本ぼへの持ちこみを防ぐ。

●コガネムシ類

- ・予察灯（磐田市内2か所及び浜松市浜名区内1か所）における7月1～20日の誘殺数は、平年並～やや多く推移している。なお、誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページ[「害虫誘殺グラフ」](#)で提供している。
- ・成虫が苗床に産卵し、その幼虫が根を食害することで生育が妨げられて欠株となる。ポット育苗時や本ぼ定植前等に幼虫を対象として薬剤防除を実施する。

●ハダニ類

- ・発生がみられるほ場では、薬剤散布を行う。育苗期に防除を徹底し、ハダニ類を本ぼへ持ち込まないように注意する。

【きく（施設）】

＜生育の概況等＞

生育は平年よりやや遅くなっている。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 7月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年0.3%）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本病の発生を助長する（生育適温：黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃）。

防除対策

- ・ 本病は高温多湿によって発生が助長される。発生しやすい条件が続く場合は薬剤の予防散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 7月下旬の巡回調査では、平均被害株率は2.8%（過去6年間平均17.3%）と例年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、アザミウマ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ クロゲハナアザミウマは葉を食害するため、発生初期に葉裏まで十分に防除を行う。
- ・ ミカンキイロアザミウマは花を食害するため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 7月下旬の巡回調査では、平均寄生頭数は3.4頭/10葉（過去6年間平均5.1葉）と例年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避け、気門封鎖剤も利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 県内3か所（静岡市、御前崎市、磐田市）のフェロモントラップの誘殺数は、静岡市では平年より多く推移しており、他2地点は平年並～少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 初期発生に注意し若齢のうちに防除を行う。施設栽培では施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#) で提供している。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ フェロモントラップにおける誘殺数は、磐田市では平年より多く推移しており、浜松市のキク産地2か所（中央区協和町及び伊佐地町）では平年並～多く推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年8～9月は発生が増加するため、被害の発生に注意し、初期防除に努める。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#) で提供している。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和7年7月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7月26日から8月25日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率60%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	20	70
1か月	降水量	40	30	30
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	10	20	70
3～4週目	気温	10	30	60

【予報の対象期間】

1か月 : 7月26日(土)～8月25日(月)
 1週目 : 7月26日(土)～8月1日(金)
 2週目 : 8月2日(土)～8月8日(金)
 3～4週目 : 8月9日(土)～8月22日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinijimusho/1058658/boujo/index.html>